

私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	291002	学校法人名	帝塚山学園		
大学名	帝塚山大学				
事業名	「帝塚山プラットフォーム」の構築による学際的「奈良学」研究の推進				
申請タイプ	タイプA	支援期間	3年	収容定員	3390人
参画組織	人文科学研究科・心理科学研究科・文学部・経済学部・経営学部・法学部・心理学部・現代生活学部				
事業概要	<p>本事業では、奈良県全体を研究のフィールドとする本学独自の「奈良まるごとキャンパス®」構想にもとづき、地域の拠点として「帝塚山プラットフォーム」を構築し、学際的な「奈良学」研究を推進する。「奈良学」は、奈良を研究対象とし、日本や世界における奈良の位置づけを明らかにするものである。産官学との連携による「奈良学」研究を通して地域の活性化や創生に取り組むことで、地域の拠点大学としてのブランドを確立する。</p>				
事業目的	<p>本事業の目的は、奈良県全体を研究のフィールドとする本学独自の「奈良まるごとキャンパス®」構想にもとづき「帝塚山プラットフォーム」を構築して学際的な「奈良学」研究を推進することで、奈良に存在する様々な文化資産や観光資源を再発見し、その成果を広く社会に発信していく取り組みを本学と地域が協働して行うことにより、地域の活性化と創生に結び付けることである。さらに、本取り組みを通じて、奈良県に立地し、地域の振興や情報発信の拠点としての重責を担う帝塚山大学の役割や存在をより明確なものとし、地域における独自性を本学の特色として打ち出すことで、本学のブランドの確立に結び付けていくことをめざす。本事業で推進する「奈良学」は、本学を設置する学校法人が併置していた帝塚山短期大学（平成12年度に本学組織に組み入れ）の名誉教授・青山茂氏が1980年代に提唱したもので、奈良を対象とした単なる「郷土史」や従来の「日本古代史」ではなく、巨視的な「鳥の目」で全体を俯瞰し、日本の歴史文化における奈良の位置づけを考えるとともに、微視的な「蟻の目」で人々を洞察し、奈良を通して日本全体の歴史文化を考察するというものである。つまり「奈良学」は、様々な世界遺産をはじめとする日本有数の文化遺産を有する奈良独自の地域性を明らかにし、そこから日本全体さらには世界へ、また逆に世界から日本へ、そして奈良へと視野を広げていく学際的な研究を意味する。奈良は、古代日本の中心地域としての側面と中世以降現代に至る日本の一地域としての両側面を有している。ローカルな視点に立脚し、グローバルな視野から世界を見ることが求められる現在、かつて日本文化の中心であり、グローバル都市であった奈良を研究のフィールドとすることに意味がある。また、奈良の地域振興、とりわけ観光分野の活性化においては、現在、奈良が最大の特色としている古代日本の文化遺産のみならず、今までは古代遺産の大きさに隠れ見過ごされがちであった中世から現代に至る特色的事象を再発見、再構築することで、今まで活用されることが少なかった観光コンテンツを実証的根拠にもとづき創出することが可能となる。本事業で構築する「帝塚山プラットフォーム」では、多くの学内関連機関や研究者・学生と外部のステークホルダーが、情報と人材を共有できる体制を準備する。本取り組みでは、直接現地に出向き、産官学連携等の形態を通して「プロジェクト型学習」の手法を駆使し、奈良県唯一の総合大学という強みを生かして、歴史学、考古学、民俗学は言うに及ばず経済学、経営学、法学、建築学、食物学から教育学までを動員して奈良を総合的かつ学際的に研究する。</p> <p>本事業は、「奈良学」について学際的な研究を行う「実証」と学際的協働による「実践・発信」の二つの側面から推進し、「帝塚山プラットフォーム」を構築する。そこで、本取り組みでは、1)「文化財・祭事」、2)「食文化・伝統産業」、3)「地域・コミュニティ」という三つの領域を設定して事業を推進する。</p>				

私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	291002	学校法人名	帝塚山学園
大学名	帝塚山大学		
事業名	「帝塚山プラットフォーム」の構築による学際的「奈良学」研究の推進		
	<p>本事業は、本学が独自に推進してきた「奈良学」研究を、全学的な学際的研究として展開することで、本学の特色化とブランド化を図り、地域の拠点大学としてのプラットフォームを構築するものである。学長の下に、副学長、学部長、研究科長、事務局長等で組織する「帝塚山大学奈良学研究推進委員会」を中心に、広報委員会や地域連携推進委員会との連携のもと、全学の教職員が一体となり、事業の推進に取り組んだ。研究活動は、「文化財・祭事」①～③、「食文化・伝統産業」④～⑤、「地域・コミュニティ」⑥～⑧の3つの領域に整理し、8つの研究テーマについて地域と連携した研究活動を展開した。各研究テーマの取り組みがそれぞれ地域に根付いた「実証」の活動となり、公開講座やシンポジウム、公開展示や様々なメディアによる情報の発信、関連書籍や報告書の刊行といった「実践・発信」の活動を通して本学の「奈良学」研究の認知が高まった。また、地域との協働を通して、地域振興や活性化に繋がるとともに、地域との連携協定や受託研究に繋がる成果も増加し、地域の拠点大学としての「帝塚山プラットフォーム」構築による、本学の地域における信頼度の向上、ブランド化にも大いに資するものとなった。</p> <p>【主な研究成果】</p> <p>1) 文化財・祭事</p> <p>① 聖徳太子関連遺跡</p> <p>法隆寺の瓦を生産した未発見の瓦窯(北倭人窯)の推定地である奈良県生駒市高山町で遺跡踏査を実施するとともに、高山町と聖徳太子の関係を地元住民に普及すべく講演会を開催した。また法隆寺の瓦を生産した未発見の瓦窯(北垣内窯)の所在が推定される奈良県生駒郡三郷町勢野東地区においても現地踏査を実施するとともに、三郷町と共催で「法隆寺の瓦を求めて～聖徳太子と古代の三郷～」(展示、講演、遺跡ウォーク)を実施した。さらに、法隆寺の瓦以降、地元で続く瓦づくりの歴史を探るべく、中宮寺出土瓦、生駒の近世瓦の調査を実施した。普及活動として、法隆寺をはじめとした古代瓦を一般の方に広く知ってもらうために、奈良県内にとどまらず、滋賀県東近江市能登川博物館・埋蔵文化財センターと共催で「東近江の古代寺院とその源流－東アジアからの道－」(展示、シンポジウム、体験講座)、京都府城陽市歴史民俗資料館と共催で「自瓦自賛－瓦を解き明かす－」(展示、解説、イベント)、大阪府島本町教育委員会と共催で「鈴谷瓦窯跡と東大寺」(展示、講演、体験講座)などを実施した。また、帝塚山大学出版会から刊行した「奈良学叢書3奈良学研究の現在Ⅱ」において、「聖徳太子と古代の三郷」として公表するとともに、調査研究の成果を「聖徳太子関連遺跡の研究－法隆寺創建瓦生産窯の調査－」と題する報告書に纏め刊行した。</p> <p>② 正倉院宝物研究</p> <p>ポスト天平文化の敷衍をテーマに、10世紀の中国・遼時代の文化財を中国内モン自治区フフホト市の内蒙古博物院及び内蒙古文物考古研究所で調査・検証した。その成果は、奈良県立橿原考古学研究所および大和文華館(奈良市)にて報告した。遼墓出土ガラス器が全てイラン以西の西アジアではなく中央アジア産であったことが明らかになったほか、これまでほとんど語られることがなかった日本・平安文化と中国・遼時代文化が唐草文様を通じ、共通の環日本海文化ともいうべき文化圏を築いていたことなどが具体例から報告され、専門とする研究者からも大いに注目された。一般の方には、帝塚山大学奈良学総合文化研究所主催の公開講座で「絢爛豪華 騎馬民族の宮廷生活－発掘でわかった契丹王朝－」と題した研究成果を発表した。また、帝塚山大学出版会から刊行した「奈良学叢書3奈良学研究の現在Ⅱ」において、「遼時代の皇族墓についての新知見」として公表した。</p> <p>③ 奈良仏像史研究</p> <p>本学が所蔵する約7000点の永野鹿鳴荘ガラス乾板資料は、奈良の仏像写真家・永野太造氏が撮影した貴重な仏像写真が含まれているが、今まで体系的な調査、整理が全くなされていなかったため、現物調査および高精細画像の撮影を行った。整理した内容は、「永野鹿鳴荘ガラス乾板資料調査概報(1)～(5)」に纏めて報告書として刊行した。また、専門家による研究会を2回実施し、一般の方には、帝塚山大学奈良学総合文化研究所主催の公開講座で「永野鹿鳴荘の仏像写真について－デジタル化作業からわかったこと－」と題した研究成果を発表した。帝塚山大学奈良学総合文化研究所の学術誌「奈良学研究」にも「永野鹿鳴荘ガラス乾板資料の調査結果について」の論文と「永野鹿鳴荘ガラス乾板資料の整理と撮影画像の特徴について」の資料報告を発表した。令和2年3月には、本事業成果の展示・公開企画として、東京都千代田区にある日本カメラ博物館「永野太造写真展「仏像－永野鹿鳴荘ガラス乾板より－」、半蔵門ミュージアム「大和路の仏にであう－奈良に生きた写真家・永野太造と仏像写真－」を、2館が時期を合わせて連携実施し、日本カメラ博物館では展示図録も作成した。</p>		

事業成果

2) 食文化・伝統産業

④大和野菜の食物学的研究

奈良の伝統野菜である大和野菜のひもとうがらし、大和丸なす、片平あかね、宇陀金ごぼう、大和まな、筒井れんこんについて、5大栄養素の分析と味認識装置による分析やひもとうがらし、宇陀金ごぼう、大和まな、大和丸なすなどの抗酸化力測定を行った。大和まなおよび宇陀金ごぼうは、遊離アミノ酸の分析も行った。実践・発信として、大和野菜を使った弁当を開発・販売するとともに、大和の伝統野菜の料理教室を開催した。最終年度には、大和野菜を用いたシフォンケーキやドーナツなどのオリジナルスイーツを開発し「第8回大和郡山良い食品博覧会」に出品、地元ケーブルテレビでは「大和野菜のクッキング」として大和野菜の簡単レシピの配信や冊子「大和野菜のレシピ」の作成などを通して大和野菜の周知、活用等についての普及活動に取り組んだ。一般の方には、帝塚山大学奈良学総合文化研究所主催の公開講座で「大和野菜の魅力」と題した研究成果を発表した。また、帝塚山大学出版会から刊行した「奈良学叢書3奈良学研究の現在Ⅱ」において、「大和野菜の魅力」として公表した。

⑤奈良晒研究

近世奈良の伝統産業であった奈良晒(さらし)に焦点を当て、学校教育法第105条の規定に基づく社会人の学び直し履修証明プログラムとして、織物講座(初級編・応用編・研究編)を開講し、延べ38名に履修証明書を発行した。実践・発信として、大学祭(あかね祭)における織物講座作品展や学外のギャラリーにおいて織物講座作品展を開催し、成果を公開することを通して、多くの来場者を迎え入れた。奈良晒や、大和機、織物の発明から現在までの歴史、染色技法、世界の織機等、織物について体系的・学際的に取り組む社会人向け講座は全国的にも珍しく、メディアからも注目を浴び、複数回の取材を受けた。一般の方には、帝塚山大学奈良学総合文化研究所主催の公開講座で「奈良晒と大和機」と題した研究成果を発表した。また、帝塚山大学出版会から刊行した「奈良学叢書2奈良学研究の現在」において、「奈良晒と大和機」として公表した。

3) 地域・コミュニティ

⑥五條市歴史学的研究

奈良県五條市に残る未成線「五新線」跡をドローンで撮影し4K映像で建設当時の風景をよみがえらせ、効果音を入れたデジタル映像「五新鉄道夢列車」を制作した。同映像は、観光振興に資するものとして、同市からの利用要請を受けて同市に無償提供し、五條市立五條文化博物館、五條市観光交流センター、京都鉄道博物館で活用されることになった。観光振興への活用を目的に、五條新町の街並みや旧藤岡家住宅の撮影も行った。また同市出身の藤岡長和関係資料を入手し、長和をめぐる同時代の文化人たちとの交流に関する調査を行った。一般の方には、帝塚山大学奈良学総合文化研究所主催の公開講座で「五條の歴史学的研究－交通遺産としての五新線を中心として－」と題した研究成果を発表した。帝塚山大学奈良学総合文化研究所の学術誌「奈良学研究」にも「近現代の交通遺産にみる奈良の産業と地勢」の論文を発表した。

⑦地域の生活文化研究

奈良県の東部高原地域、北西部地域を中心に民俗資料や聞き取り調査による生活文化研究を行った。特に奈良県天理市の「福住プロジェクト」での研究成果が大きく、この内容を活用した行事を多数開催することとし、併設の帝塚山小学校においては奈良の昔の暮らしについて理解を深めてもらうことを目的とした社会科の授業を実施した。また、一般の方に広く知ってもらうために、奈良県立図書館との共催展示「奈良学との出会い!山里に行き交う職人たち－天理・福住永井清繁画帳から－」や奈良県立民俗博物館と共催で特別企画展示「絵と道具でたどる昔の奈良の暮らし」を実施した。帝塚山大学出版会から「奈良山里の生活図誌」を刊行し、研究成果の普及活動に取り組んだ。

⑧奈良県北西部歴史文化研究

申請時には研究テーマを①～⑦としていたが、事業推進にあたり、新たなテーマを設定する機運が高まり開始した研究プロジェクトである。奈良県生駒市(富雄川左岸地域)において現地調査を実施し、当該地域の古道に関わる文化財の概観的な把握の成果が得られた。また、奈良県斑鳩町神南地区における現地調査では口承、文書による情報、瓦製造に関わる情報の収集の成果が得られた。研究成果は、帝塚山大学奈良学総合文化研究所主催の公開講座で「矢田地蔵縁起絵の世界－奈良北西部の歴史・文化研究－」、「大和「とみ」地域の古代史」と題した研究成果を発表した。さらに、本研究に関わるものも含む本学所蔵の古文書を、帝塚山大学附属博物館において企画展示「奈良学との出会い 帝塚山大学所蔵の古文書」展として展示・公開した。奈良市西部公民館主催の公開講座「学園前の古代・現代・未来」においても現地調査の成果を発表した。帝塚山大学出版会から刊行した「奈良学叢書2奈良学研究の現在」において、「斑鳩の民俗文化－奈良の生活文化研究－」、「矢田地蔵縁起絵の世界－奈良北西部の歴史・文化研究－」、「奈良学叢書3奈良学研究の現在Ⅱ」において、「帝塚山大学所蔵古文書」として公表した。研究成果として、民俗文化調査として「奈良県生駒郡斑鳩町神南の民俗文化」、古道の調査として「富雄川流域の古道と歴史」の報告書を作成した。

【奈良学ブックレットの刊行】

本事業の取り組みおよび研究成果を社会一般に広く公表することを目的に、各研究テーマで刊行した報告書とは別に、帝塚山大学出版会から「奈良学叢書2 奈良学研究の現在」および「奈良学叢書3 奈良学研究の現在Ⅱ」を刊行した。本事業における各取り組みについての公開講座や展示を中心に、ビジュアルを入れて分かり易く解説した内容としている。インターネット経由で誰でも購入を可とした。

【奈良学フォーラムの開催】

最終年度に、本事業の集大成を社会一般に広く周知するため、学外の施設で300名～500名規模の「奈良学フォーラム」を開催する計画で、講演者や報告者、展示等を決めて開催告知のチラシも配付、新聞での告知もしていたが、新型コロナウイルス感染症拡大によるイベント自粛要請により止む無く中止となった。

【ブランディング事業の経費の活用】

主な支出項目は、本事業推進のための研究機器、基盤資料等の購入費、推進員人件費、国内旅費、webサイト構築費、パンフレット・チラシ作成費、研究成果報告集等の印刷製本費等であった。この中で特に、研究機器では、ガラス乾板収納専用キャビネット、デジタル化のための高精細デジタルカメラ、大和野菜分析のためのクリーブメータ物性試験システム、現地調査に活用するハンディ3Dスキャナ、基盤資料では、「奈良学」関連資料として、古代鬼瓦に通じるテラコッタメデューサ頭飾アンティフィックス（大英博物館所蔵品より優品）、奈良晒関係屏風、畿内出土の古代瓦、奈良晒（江戸時代～明治時代の3点、奈良晒所蔵大学は本学のみ）、奈良晒関係の大和機一式等の「奈良学」研究に特化した物品や資料を購入できたことで、研究内容が格段に充実した。

【ブランディング戦略の指標と達成度】

本事業の推進に当たっては、「受験生・保護者」、「在学生・保護者」、「自治体・企業・研究関連機関」、「地域住民」という各ステークホルダーに対しての様々な指標を設定し、毎年度の効果検証を各事業推進に反映し、徹底した進捗状況管理を行うとともに、状況に応じた見直し等のPDCAサイクルを回しながら取り組んできた。高く設定した各指標について、期間内での成果が途上のものもあったが、公開講座参加者数・附属博物館来場者数や在学生実学プロジェクト参加率は大きく向上した。以下は「奈良学」研究関連指標として高い成果を挙げ、本学のブランド化に大きく寄与したものである。

・「奈良学」の認知度指標として、公開講座アンケートによる「奈良学」の認知度を達成目標80%に設定し、全17回の公開講座でアンケート調査を実施した結果、「奈良学の帝塚山大学」の認知度は、最高で94%に達した。

・本学と地域住民との交流指標として、公開講座参加者数・附属博物館来場者数達成目標を採択前年度比20%増に設定、採択前年度来場者数5,668名に対して、約8,654名（約150%増）を達成した。

【外部評価体制と講評等の概要】

本事業について、学外有識者からの客観的な評価を得ることで、本事業の実施内容や成果を振り返り、次への展開を策定するため、地域行政、産業界、教育界からの3名に外部評価委員に就任してもらい、毎年度末に委員会を開催して本事業各取組成果を報告し、その上で以下の講評や評価、意見をいただいた。3年間同じ委員に評価いただいたことで、PDCAサイクルを回しながら本事業の開始から終了までの評価を正確かつ適切に行うことができた。外部評価委員からの最終的な講評は次のとおりであった。

（地域行政の視点から）

・本事業におけるアウトカムをどう考えるか。帝塚山大学が「奈良学」研究に取り組んだことで、奈良出身学生の増加、県外出身学生の卒業後の県内就職や居住等の数値的向上の成果が出てきているが、アウトカムについて今後更なる検証も必要である。また、最大のアウトカムは、地域を理解し地域のリーダーとなってくれる人材を今後いかに多く輩出してくれる大学であるかということが大学のブランドになる。

（産業界の視点から）

・「実学の帝塚山大学」を標榜し、卒業生を含め、以前からある学部から新しい学部まで全ての学部や教職員を巻き込んで事業を推進しており、帝塚山大学は本事業を通して、大学に求められる独自の個性を遺憾なく発揮出来ていた。本研究結果拡充のための次の展開は、大学を核（プラットフォーム）として、地元で奈良の特色を生かした活動を行う団体・者との繋がりをさらに強固にすることが肝要である。

（教育界の視点から）

・本事業では、帝塚山大学は奈良に関する研究のベースを作った。今まで「奈良学」とは何かというものがあつたが、それを帝塚山大学が作ってしまったと言える。今後は、奈良時代から現在までの都市地域（奈良県北西部）を今の「奈良学」がどう捉えているのか、特に昭和の戦後以降の都市地域（帝塚山大学付近）についての研究を行う事で「奈良学」研究の深化が期待できる。

今後の事業成果の活用・展開

外部評価委員からの講評にもあつたように、「奈良学」研究が本学の特色的な研究であることの認知が高まり、定着しつつある状況となっている現況は、本学のブランド化にも大きな影響があることから、支援終了後も奈良学研究推進委員会組織を継続させ、PDCAサイクルを回しながら全学部、全研究科、全教職員で取り組む学際的な「奈良学」研究を推進する。

1) 文化財・祭事分野については、各研究テーマ内容が、本学にしか出来ないレベルに達しているため、学内における研究に加え、学外での展示公開にも積極的に取り組む。また、一般の方向けの公開講座や展示とともに、より高度な専門家を対象とした研究会等にも取り組む。このうち、③奈良仏像史研究の成果は、2020年6月下旬から9月までの間、東京・日本カメラ博物館および半蔵門ミュージアムにて展示公開をすることが決定している。

2) 食文化・伝統産業については、大和野菜の弁当やスイーツの開発、レシピの周知を通して地産地消の観点も含め更なる地域貢献、活性化への取り組みを推進する。奈良晒も実物の文化財資料を入手し、今後の展示公開に活用するとともに、「帝塚山大学織物マイスター」の履修証明プログラムで付与する称号の、奈良観光振興における認知や活用を更に促進させる。

3) 地域・コミュニティについては、従前の奈良イコール古代のイメージを払拭させる近世、近現代までの奈良の魅力創出に向けた取り組みを継続する。また近世、近現代の地域における生活文化史は、古老への聞き取り等、地道な調査を継続しないと消滅してしまうので、継続して取り組み、記録するとともに当時の生活の再現にも、地域の博物館等と連携して取り組む。

本事業による支援により「奈良学」研究の中心的なテーマが明確となり、推進に必要な機器の整備や貴重な関連資料の購入が出来たことで、今後の研究が加速しより充実したものになると確信している。本事業の推進により地域社会に対して「帝塚山プラットフォーム」が浸透し、相互の連携による研究や地域貢献活動も活発化してきている。本事業の対象地域を奈良から大阪・京都・滋賀・東京そして東アジアへと拡大した視点を更に拡充することで、更なる地域社会への貢献と本学のブランド化を、本事業内容の継続と充実を通して実現していく。